

女子大学生の生活環境と将来設計

竹田 美知*・山下 美紀**・大石 美佳***・正保 正恵****

*神戸松蔭女子学院大学、**ノートルダム清心女子大学、***鎌倉女子大学、
****福山市立大学

Author's E-mail Address: m-takeda@shoin.ac.jp

Living Conditions and Future Plans of Women's University Student

TAKEDA Michi*, YAMASHITA Miki**, OISHI Mika***, SHOUHO Masae****

*Kobe Shoin Women's University, **Notre Dame Seishin University,

Kamakura Women's University, *Fukuyama City University

Abstract

本研究の目的は教育から労働への移行期である女子大学生を対象として、どのように将来のライフコースを設定しているか、将来のライフコースを設定するときに家族資本がどのように期待されているか、さらに社会的資本がどのように認知され期待されているかについて明らかにした。調査は、2012年11月から12月に実施され、関東、関西、中国地区の女子大生を対象として無記名による自記式質問紙法により実施された。調査の結果、現在の両親の役割分担の現状が女子大生のライフコースに大きく影響をおよぼし、さらに「性別役割分業」に対する意識が将来のライフコースを規定していることが明らかになった。また、母の職業経歴は娘である女子大生の役割モデルとして捉えられており、理想のライフコースも母のライフコースを踏襲している。専業主婦コースを選択した群は家族内経済資源が裕福であるが、家族内社会関係資源である性別役割規範に将来のライフコースを縛られている。両立コースを選択した群は資格・技能といった個人資源を持つことを希望し、女性が働くことについて家族がサポートしており、家族外社会関係資源を豊富に持っていた。

The objective of this study was to investigate how female university students set their future life course during the transitional period from education to employment, what expectations they have regarding family capital when setting their future life course, and how they perceive social capital and set expectations. An anonymous self-administered questionnaire survey was conducted from November to

December 2012, targeting female university students in the Kanto, Kansai, and Chugoku regions of Japan. Results show that present role-sharing by their parents greatly influenced the expected life course of these students and that an awareness of the “division of roles by gender” conditioned expectations for their future life course. In addition, the female university students took their mothers as role models, leading their ideal life course to follow in their mothers’ footsteps. Although respondents that indicated plans to be a homemaker had abundant family economic resources, female university students felt constrained to a life course within the norms of gender roles, which is a family social resource. Respondents who indicated a desire for other life courses had the ambition of acquiring individual resources, such as qualifications and skills, as well as abundant social resources outside the family and parents who support women working.

キーワード：ライフスタイル、経済資本、人的資本、社会関係資本

Key Words: lifestyle, financial capital, human capital, social capital

1. 研究の背景と目的

若者の失業率の高さや非正規雇用の増加は 1990 年代から既に始まり、就職氷河期と呼ばれる 20 歳から 34 歳で特に著しい。また「第 6 回 21 世紀成年者縦断調査」によると、非正規雇用や所得が低くなるにつれて、結婚や出産が難しくなる傾向が浮かんでいる。このような若者の非正規雇用の増加、若者のライフコースの変容の原因として、若者自身のメンタリティーや文化の問題として「自己責任論」が登場した。

特に女性の場合は、ジェンダー役割にとらわれた見方から、女性の職業意欲の欠如や女性自身が職種や勤務地の制約を選択することによって就業率が伸び悩んでいると言われてきた。女性の「フリーター」や「ニート」が親に依存している状況を「パラサイト」と呼び、親の育て方の問題として親の自己責任まで問われた（山田、1999）。その後、若者及びその家族の「自己責任論」に疑問符が投げかけられた。宮本みちこ（2004）は、『ポスト青年期と親子戦略』において、もともと教育から労働への移行が不安定な社会構造になっている中で、若者が家族に経済的依存する期間が長期化し「若者の貧困」や「若者の将来に対する不安」が家族の中に隠されてきたことを指摘した。職業選択や職業に必要とされる高等教育の選択をするスタート時点から、家族資本を持たない若者は、最初から不利な立場にたっており選択の自由も選択の機会もない不平等な状態であることが問題視された。

本研究の目的はこのような背景のもとに、教育から労働への移行期である女子大学生を対象として、どのように将来のライフコースを設定しているか、将来のライフコースを設定するときに家族資本がどのように利用されているかを解明することである。さらに社会的資本がどのように認知され活用されているかを明らかにしたい。

2. 先行研究

女性の理想とするライフコースは、これまで専業主婦コースが減少し非婚就業コースと両

立コースが増加してきたと報告されてきた。国立社会保障・人口問題研究所の「第14回出生動向調査・独身者調査」によると、図1のように、女性が理想とする自らのライフコースは平成9年以降それほど大きな変化はない。ところが理想と異なり、予定するライフコースは平成9年以降専業主婦コースが17.7%から9.1%に大きく減少し、両立コースが15.5%から24.7%へと増加している。また非婚就業コースも9.3%から17.7%へと増加している。

「専業主婦コース」が減少した理由として「性別役割分担意識」に賛成する者の減少が推測される。しかし「性別役割分担意識」についての最近の調査である「男女共同参画社会に関する世論調査（平成24年度10月調査、内閣府 2013）」によると、「性別役割分担意識」に

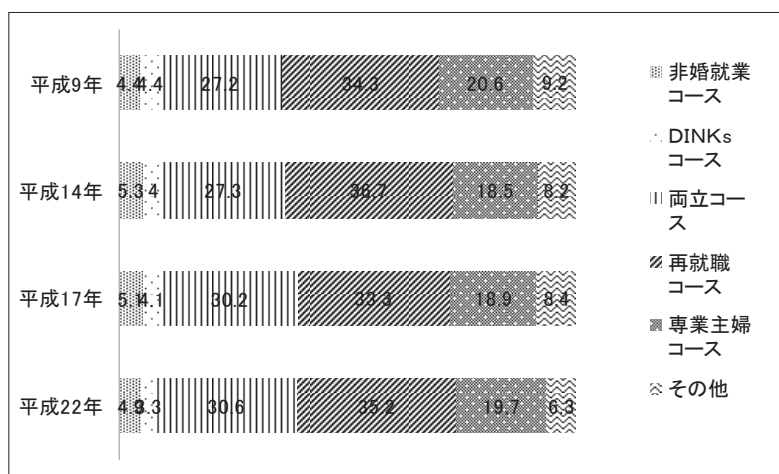


図1 女性が理想とする自らのライフコース

国立社会保障・人口問題研究所の「第14回出生動向調査・独身者調査」：
調査対象：18歳以上35歳未満の未婚女性のみ集計

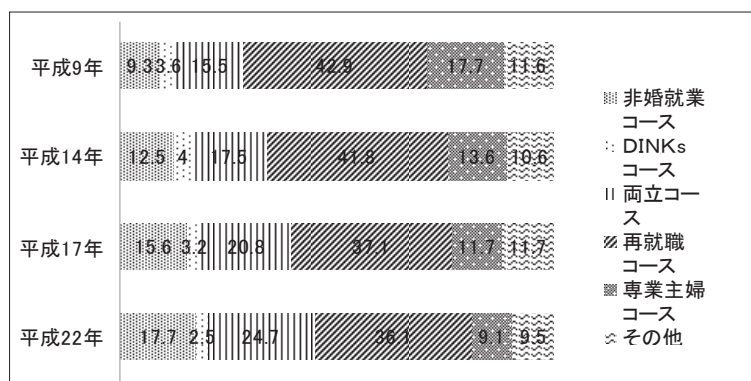


図2 女性が予定している自らのライフコース

国立社会保障・人口問題研究所の「第14回出生動向調査・独身者調査」：
調査対象：18歳以上35歳未満の未婚女性のみ集計

若い世代で「賛成」が増加したことを以下のように報告している。

「夫は外で働き、妻は家庭を守るべき」という、いわゆる固定的性別役割分担意識については「賛成」の割合が低下傾向にありましたが、今回調査では、賛成が前回より 10.3 ポイント上昇し 51.6%、反対が 10.0 ポイント低下し 45.1% となっています。男女別にみると、男性は賛成が前回より 9.4 ポイント上昇し 55.2%、反対が 10.1 ポイント低下し 51.1%、女性は賛成が 11.1 ポイント上昇し 48.4%、反対が 9.8 ポイント低下し 48.8% となりました。年齢別にみると、20 歳代で大きな変化があり、前回調査より賛成が 19.3 ポイント上昇の 50.0%、反対が 20.5 ポイント低下の 46.6% となっています（内閣府、2013）。

若い世代は「性別役割分担意識」に対して反対は低下しているにもかかわらず、予定するライフコースとして「両立コース」や「非婚就業コース」は増加し「専業主婦コース」は低下している。理想のライフコースが変化していないのに予定のライフコースにおいて「専業主婦コース」の低下が生じたのは、「理想としては専業主婦を目指していても、経済的なことを考えると両立コースが予定される」と厳しい現実若い世代が目をつけているからではないだろうか。

山田は「女性労働の家族依存モデルの限界」（山田、2013）の中で、「主観的願望として従来のモデル（性別役割分業家族）に包摂されることを期待しつつも、客観的現実として、どこにも包摂されないアンダークラスの女性が出現し、共働きをしなければ生活できない、包摂してくれる結婚相手が見つからない、親にパラサイトも出来ずに貧困化している若い女性が出現している」と若い女性をめぐる願望と実態のパラドックスを紹介している。

上野は「若年層で専業主婦志向や性別役割分業を肯定する意見が増えつつあるが、家庭観や仕事観にはジェンダーや社会階層による違いが存在する」と仮定し、女子大学生を対象とした調査を行った。その結果、女子大学生は仕事の負担を大きく感じる場合は専業主婦という選択を考え、そうでない場合は仕事を持つことを選択するという志向が存在するという結論を得ている（上野、2012）。

本研究ではこのような先行研究から、女子大学生が将来のライフコースを選択する時にどのような影響要因があるのか、理論的枠組みとして資源論を採用し、調査を計画した。次節では家族資源論の系譜をたどりながら、家族資源論を概説する。

3. 理論的枠組み—家族資源論の有効性—

すでに、家族における資源説はブラッドとウルフによるデトロイト調査によって提唱されて半世紀以上経つ。夫と妻の相対的な資源によって夫婦の勢力構造が決定するという彼らの命題は多くの国で調査された。しかし一連の調査の中で夫と妻の持つ個人的な資源の相対量がそのまま勢力構造に影響を与えているという結果は得られなかった。ブラッドとウルフの資源説は「社会規範」（ブラッドとウルフでは慣習という概念で説明されている）の影響を過小評価し、また彼らの一連の調査において概念化や変数化において問題点を残してしまった（渡部、1977）。菰刈（菰刈、1992）は、ブラッド・ウルフ以後の欧米の夫婦の勢力構造を踏まえながらロッドマンの「規範的—資源説」すなわち「文化的脈絡における資源説」を紹介

している。しかしその後、変化の激しい現代家族の諸相分析として多様な家族に焦点があてられ、一般的な夫婦の勢力構造のような家族の内部構造についての研究が下火になってしまった。

そのような状況の中で、1980年代から今日にいたるまで家族資源論は、単身赴任家族、介護家族の分析に対して、二重ABC-Xモデルのような家族ストレス論の中でのモデルとして使われてきた。在宅老人介護者の危機処理のための資源として松岡は、マッカバンの提唱した個人、家族、コミュニティーをさらに発展させて個人資源、家族資源、親族資源、友人・知人や近隣などの準社会資源、行政などの社会資源の5つにさらに分類し人的資源、物的資源、経済資源の3つのレベルでとらえている（松岡、1993、1994）。

松岡の資源の分析枠組みは、災害復興時の家族ストレスの分析などに応用された（山西、1999）。しかしその家族資源の分析では先のロッドマンが指摘したような資源の文化的脈絡の問題は配慮されず、単に個人（行為者）が所有している物的資源、経済資源や、個人を援助できる人的資源の有無に焦点を当てられた。資源論は社会的行為に対して、原則として経済的な合理的基準を採用する（例えば資源を持っている個人は持っていない個人よりは他者に影響を及ぼすことができるなど）。しかし個人が持つことのできる資源自体、文化的脈絡、社会規範、社会構造に規定されるという事実を無視することはできない。例えばどんなに経済的資源があっても、「女性が高学歴をつけるべきではない」という社会規範があればその経済資源は大学進学には使われない。コールマンは、「個人が持つことのできる資源自体、文化的脈絡、社会規範、社会構造に規定される」というこれまでの資源論の限界に「社会関係資本」という概念を導入して、資源論の有効性を高めた（コールマン、1988）。

「物的資本」は、材料に変化を加えて生産に役に立つことで物的資本が創出されるのと同じように、「人的資本」も、人間に変化を生じて、技能や知識を身につけさせ、それまでとは違った仕方で行為できるようになることで創出される。しかし社会関係資本は、行為を促す人々の間で関係が変化することで創出される。…中略…物的資本や人的資本が生産的な活動を促進するように、社会資本も生産的な活動を促進する。例えば信頼性（trustworthiness）や信頼（trust）が内部に遍く存在している集団は、そのような信頼性や信頼がない集団よりずっと多くのことを成し遂げることができるのである（コールマン、1988.）。

コールマンは、「社会関係資本」の例として、集団の中に存在する信頼、負っている恩義、情報を獲得できる力を示している（コールマン、1988、野沢、2007）。コールマンはさらに家族の社会関係資本が子どもの学習にどのように影響するか調査を行い、財的資本、人的資本、社会関係資本の3つの資本を用いて分析を行っている。コールマンによって「財的資本」は、「家族の財産や収入、『人的資本』は両親の教育程度、『家族内社会関係資本』は親と子の関係の強さ、『家族外社会関係資本』は親同士のコミュニティー内での結びつきの強さや親のコミュニティーとの関わりと規定された（コールマン、1988）。

これまでの資源論の立場を踏まえつつ、上述したコールマンの提唱する「社会関係資本」の概念を取り入れ、調査枠組みを設定し、次のような仮説を立てた。

仮説 1 個人の資本（経済資源もしくは人的資源など）の種類、程度はライフコースの選択に影響する。

仮説 2 家族内社会資本（女子大生と家族との関係資源など）の種類、程度はライフコースの選択に影響する。

仮説 3 家族外社会資本（女子大生と大学との関係資源、友達との関係資源、女子大生の就職先との関係資源など）の種類、程度はライフコースの選択に影響する。

上記の 3 つの仮説を機軸として女子大生を対象とした調査によって検証を試みた。

4. 調査方法

（データ）

調査は、2012 年 11 月から 12 月に関東、関西、中国地区の女子大生を対象として無記名による自記式質問紙法により実施された。有効回収数は 1211 票であった。

（変数）

理論枠組みに基づき、家族のライフコースに影響する資本を操作変数として設定した。まず、個人の資本、家族内社会資本、家族外社会資本とレベルを分け、さらにそのレベルごとに資本の種類に着目して経済資源、人的資源、社会関係資源を表 1 のように設定した。

また理想のライフコースを①非就業継続コース、② DINKs コース、③両立コース、④子育て後再就職コース、⑤退職し専業主婦コースと設定した。なお質問文には「結婚前からずっと働かない」というライフコースも回答として用意したが、回答した人数が 10 人未満のため、クロス集計分析および一元配置分散分析には使用しなかった。

（対象者のプロフィール）

女子大学生の希望するライフコースとしての回答パターンは図 3 に示す。女子大学生を対象とした調査年齢に対応した国立社会保障・人口問題研究所の「第 14 回出生動向調査・独身者調査」の 18 歳から 19 歳と 20 歳から 23 歳の結果は図 4 のとおりである。

両図を比較すると、本調査の対象者のほうが、「第 14 回出生動向調査・独身者調査」の対象者よりも再就職コースの希望者が多く、専業主婦コースの希望者が少ない。しかし両立コースはほぼ同じ割合であることがわかる。

5. 調査結果

5-1 性別役割分業意識や母の役割モデルは娘のライフコース選択に影響を及ぼしているか？

（両親の役割分担と理想のライフコース）

先行研究で述べた「性別役割分担意識」については、二つの変数を設定した。「両親の役割分担の現状」と「理想の夫婦の役割分担」である。これら二つの変数を「性別役割分担意識」

表 1 各資源の種類と調査で用いた操作変数

資本	対象	資源の種類	変数
個人資本	個人	経済的資源	経済的自立
			金銭的充足度
			将来の暮らし向き
		人的資源	精神的自立
			親からの離家
			資格・技能
家族内社会資本	家族レベル	経済的資源	家計状況
		人的資源	父学歴
			母学歴
		社会関係資源	就職への家族からの圧力
			結婚への家族からの圧力
			子どもを持つことへの家族からの圧力
			女性の就職に関する家族規範
			家事・育児に関する家族規範
			家族が気持ちをわかってくれる
家族外社会資本	友人レベル	社会関係資源	同性の交友関係
			異性の交友関係
	大学レベル	社会関係資源	学修生活満足度
			学校生活満足度
			先生との関係満足度
			就職支援満足度
	就職レベル	経済的資源	給料重視
		人的資源	就職能力発揮重視
		社会関係資源	就職知名度重視
			就職福利厚生重視

* 出典：国立社会保障・人口問題研究所の「第 14 回出生動向調査・独身者調査」集計表から作成

の標識として設定し理想のライフコースとの関係について図 5 のように検証した。

結婚を希望しない、子どもを持つことを希望しないライフスタイルを選択する学生は母が家事・育児を専業しているケースが多い。理想のライフコースとして両立コースを選んだ学生は、父母が仕事、父母が家事育児の完全分担しているケースが多い。再就職コースを選んだ学生の場合は、父仕事、母家事・育児の役割分担が多く、特に専業主婦コースを選択した学生は半数以上が父仕事、母家事・育児の役割分担のケースが多い。この結果から現在両親が性別役割分担をしている場合は、専業主婦コースを選択するケースが多いことがわかる。

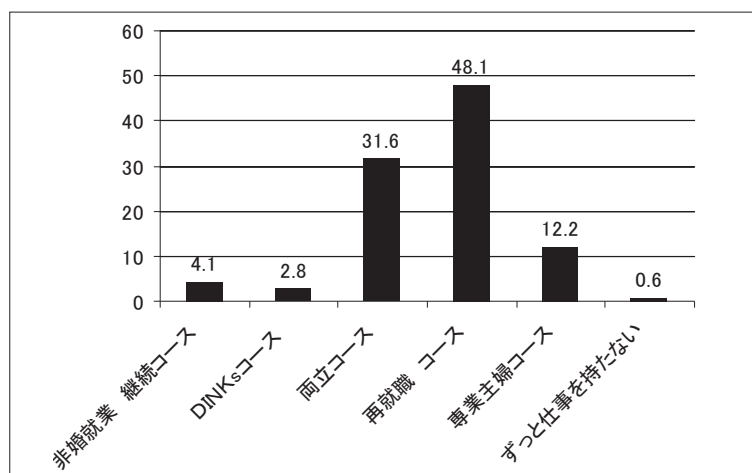


図3 女子大学生の理想のライフコース

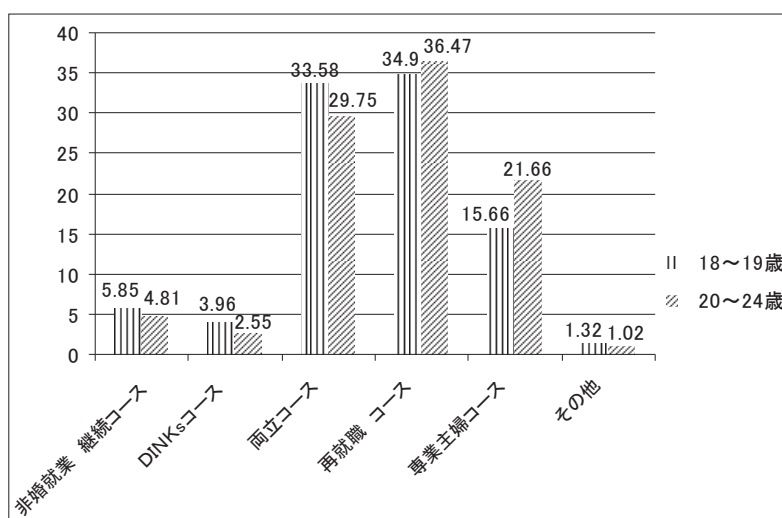
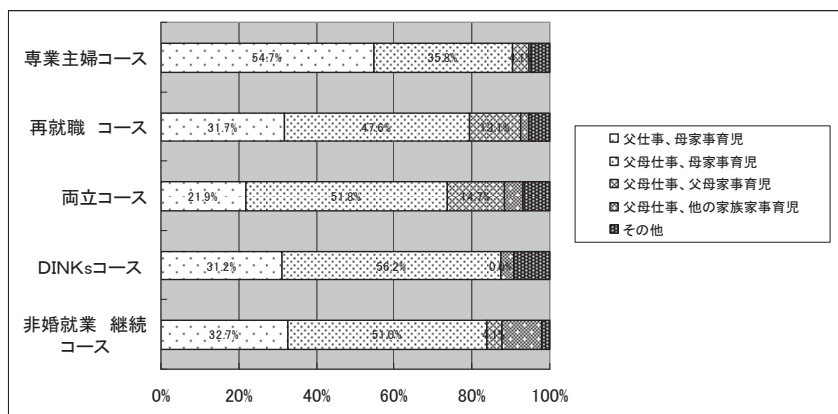


図4 「第14回出生動向調査・独身者調査」における女性のライフコース

調査対象：18歳以上24歳未満の未婚女性のみ集計

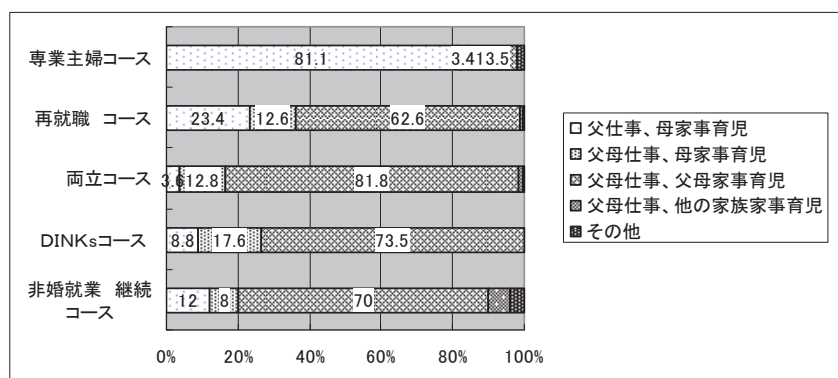
(理想の夫婦の役割分担と理想のライフコース)

図6のように、両立コースを希望する大学生はその81.8%が夫妻仕事、夫妻家事育児の役割分担を希望している。結婚や子どもを持たないコースを希望する学生も理想の役割分担として約70%が夫妻仕事、夫妻家事育児の役割分担であった。それに対して専業主婦コースを希望する学生の理想のライフコースは81.1%が夫仕事、妻家事育児の役割分担であった。



p<0.05

図5 理想のライフコースと両親の役割分担のクロス集計結果



p<0.05

図6 理想のライフコースと理想の役割分担のクロス集計結果

(母の職業経歴と理想のライフコース)

現在の両親の役割分業が女子大生のライフコースに影響を及ぼしていることが検証されたので母の職業経歴は子である女子大生にどのように受け止められているかを検証した結果を図7のように示した。

大学生が理想とするライフコースは母のライフコースと連動している。母が働かず専業主婦であった場合は子である女子大生ももっとも専業主婦コースを多く選択している。母が結婚・出産後退社して専業主婦になった場合は、子である女子大生が専業主婦コースを選ぶと答えた学生は48.0%で、母が再就職してパートおよび正社員になったケースの約半数近くの女子大生は、再就職コースを理想のライフコースと考えている。母が仕事を継続している場合は、その子どもである女子大生の54.1%は両立コースを希望している。このように娘のライフコースは母のライフコースに大きく影響されている。

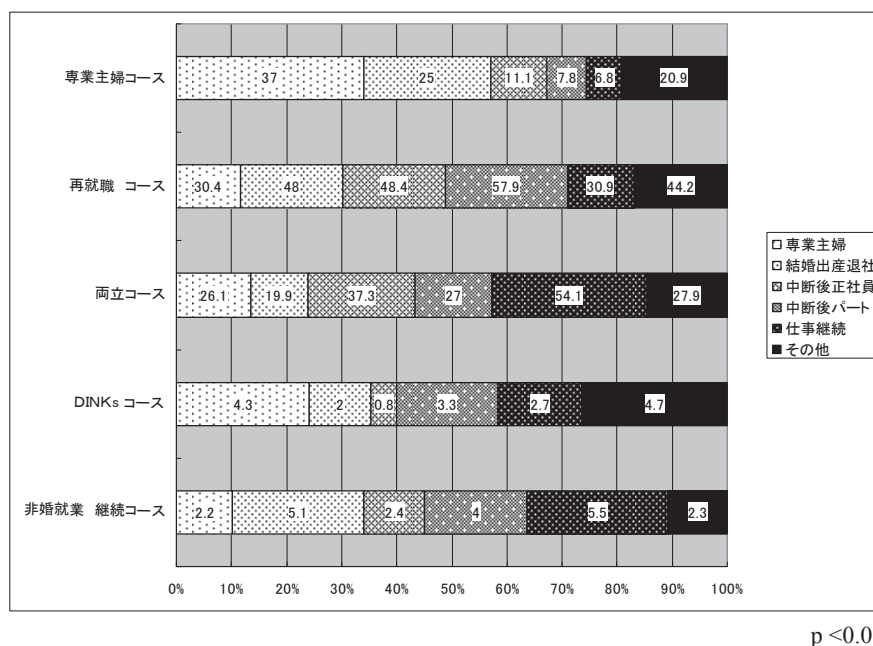


図7 理想のライフコースと母の職業経歴のクロス集計結果

以上の結果から、現在の両親の役割分担の現状が女子大生のライフコースに大きく影響をおよぼし、さらに「性別役割分業」に対する意識が将来のライフコースを規定していることが明らかになった。また、母の職業経歴は娘である女子大生に役割モデルとして捉えられており、理想のライフコースも母のライフコースを踏襲している。

理論枠組みで述べた仮説1における「個人の資源」は指標化して変数とした「理想の家族内役割分担」とすると、女子大学生は個人の資本（経済資源もしくは人的資源など）の種類、程度によって将来のライフコースを選択しており、仮説1は検証された。

また同様に仮説2における「家族内関係資源」を指標化して「現在の親夫婦の家族内の役割分担規範」とすると、女子大学生はこの資源の程度によって将来のライフコースを選択している。また母の職業経歴が子である娘のライフコースの役割モデルとなっていることは、仮説2の検証といえよう。

山田は「女性労働の家族依存モデルの限界」においてで「経済的資源がライフコースの選択に重要な影響を持つ（山田、2013）」と主張したが、実際には、多くの種類の異なる資源が女子大生のライフコース選択に関わっていると想定される。次章では表1に示した資源とライフコース選択の関係を分析する。

5-1 女子大生の資源とライフコース選択はどのように関係しているか？

ライフコースの選択群によって表1で示した変数がどのような評定となるか一元配置分散分析・多重比較(Tukey)を行った。各群のケース数が等しくないため、等分散の検定(Levene)

表 2		①未婚就業 継続コース	②DINKs コース	③両立 コース	④子育て後再 就職 コース	⑤退職し専業 主婦コース	全体	F 値 * p<0.05	多重比較の 結果 (p<0.05)
個人	経済的自立	1.68 (0.91)	1.68 (0.77)	1.88 (0.76)	1.84 (0.80)	1.81 (0.78)	1.84 (0.79)	1.20	
	金銭的充足度	2.66 (1.26)	2.65 (1.23)	2.98 (1.18)	3.05 (1.13)	3.07 (1.18)	3 (1.16)	2.27	
	将来の暮らし向き	2.13 (0.77)	2.24 (0.66)	2.52 (0.69)	2.44 (0.65)	2.71 (0.80)	2.48 (0.70)	8.691 *	⑤>①, ②, ③, ④, ②, ③, ④>①
	精神的自立	2.12 (0.85)	2.18 (0.83)	2.34 (0.73)	2.34 (0.72)	2.22 (0.76)	2.31 (0.74)	2.098	
家族	親からの離家	2.52 (0.81)	2.71 (0.91)	2.59 (0.87)	2.39 (0.86)	2.23 (0.87)	2.45 (0.87)	6.610 *	②>⑤, ③>④, ⑤
	資格技能	2.18 (1.02)	2.38 (0.95)	2.61 (0.93)	2.54 (0.91)	2.19 (0.88)	2.5 (0.93)	7.552 *	③>①, ⑤, ④>⑤
	家計状況	2.57 (0.89)	2.5 (0.79)	2.63 (0.76)	2.68 (0.73)	2.91 (0.82)	2.68 (0.77)	4.186 *	⑤>②, ③, ④
	父学歴	3.71 (1.65)	4.1 (1.47)	3.82 (1.46)	3.89 (1.46)	4.03 (1.42)	3.88 (1.47)	0.98	
社会関係資源	母学歴	3.14 (1.37)	3.47 (1.27)	3.31 (1.22)	3.24 (1.20)	3.3 (1.22)	3.28 (1.22)	0.56	
	就職への家族から 圧力	3.64 (0.78)	3.44 (0.79)	3.54 (0.72)	3.52 (0.73)	3.37 (0.75)	3.51 (0.73)	1.94	
	結婚への家族から の圧力	2.18 (1.04)	2.24 (1.05)	2.82 (0.93)	2.85 (0.91)	2.94 (0.90)	2.8 (0.94)	10.091 *	③>①, ②, ④>①, ②, ⑤>①, ②
	子どもを持つ事へ の家族からの圧力	2.12 (0.98)	2.12 (0.91)	2.7 (0.95)	2.71 (0.90)	2.71 (0.99)	2.67 (0.94)	7.804 *	③>①, ②, ④>①, ②, ⑤>①, ②
友人	女性の就職に関 する家族規範	2.84 (0.93)	2.94 (0.81)	2.88 (0.84)	2.48 (0.77)	2.25 (0.74)	2.61 (0.83)	25.135 *	①>④, ⑤, ②>④, ⑤, ③>④, ⑤, ④>⑤
	家事・育児に関 する家族規範	2.1 (0.93)	2.18 (0.97)	2.34 (0.81)	2.45 (0.83)	2.59 (0.81)	2.41 (0.83)	5.29	④>①, ⑤>①, ③
	家族が気持ちを わかってくれる	2.54 (0.71)	2.59 (0.86)	2.96 (0.75)	3.01 (0.72)	2.94 (0.82)	2.95 (0.75)	6.776 *	③, ④, ⑤>①, ③, ④>②
	同性の交友関係	3.02 (0.94)	3.18 (0.62)	3.34 (0.62)	3.33 (0.64)	3.26 (0.64)	3.3 (0.65)	2.813 *	③>①, ④>①
大学	異性の交友関係	2.54 (0.91)	2.5 (0.86)	2.71 (0.88)	2.7 (0.87)	2.6 (0.88)	2.68 (0.87)	1.37	
	学修生活満足度	2.74 (0.80)	2.79 (0.81)	2.73 (0.73)	2.7 (0.66)	2.64 (0.65)	2.71 (0.69)	0.86	
	学校生活全体満足度	2.7 (0.86)	2.91 (0.83)	2.96 (0.79)	2.96 (0.76)	2.87 (0.82)	2.94 (0.78)	1.73	
	先生との関係満足度	2.96 (0.67)	2.88 (0.69)	2.78 (0.72)	2.69 (0.69)	2.61 (0.68)	2.73 (0.70)	3.857 *	①>⑤
就職先	就職支援満足度	2.72 (0.73)	2.71 (0.80)	2.74 (0.74)	2.67 (0.68)	2.54 (0.65)	2.68 (0.70)	1.96	③>⑤
	給料	3.14 (0.53)	3.06 (0.50)	3.05 (0.59)	3.04 (0.56)	2.98 (0.64)	3.04 (0.58)	0.86	
	就職能力発揮重視	3.44 (0.58)	3.21 (0.64)	3.39 (0.59)	3.29 (0.59)	3.21 (0.67)	3.32 (0.61)	2.338 *	③>⑤
	就職知名度重視	2.2 (0.90)	2.32 (0.77)	2.31 (0.77)	2.29 (0.76)	2.34 (0.73)	2.3 (0.76)	0.38	
	社会関係資源	3.38 (0.64)	3.47 (0.56)	3.43 (0.60)	3.33 (0.61)	3.22 (0.67)	3.35 (0.62)	3.660 *	③>⑤

を行い Tukey 法を選択した。表 2 はその結果である。

(個人資源)

表 2 より、個人資源のうち、経済資源については「将来の暮らし向き」の評価が、さらに人的資源については「親からの早く離れ生活したい」という親からの自立度、資格や技能の習得度などが、ライフスタイルの選択に影響を及ぼしていた。

1) 経済的資源—将来の暮らし向き

専業主婦コースを選択した群は、他のライフコースを選択した群よりも将来の暮らし向きについてゆとりがあると思っている (表 2 ⑤>①, ②, ③, ④)。また、非婚就業継続コースを選択した群は、他のコースを選択した群より将来の暮らし向きは苦しいと思っている (表 2 ②, ③, ④>①)。

2) 人的資源—親からの離家、資格や技能の習得—

DINKs コースを選択した群は専業主婦コースを選択した群より親から早く離れて自立したいと思っている (表 2 ②>⑤)。また両立コースを選択した群は、再就職コース群や専業主婦群より親からはやく離れ自立したいと思っている (表 2 ③>④, ⑤)。

両立コース群は、非婚就業コース群や専業主婦コース群よりも資格や技能の習得に力を入れている (表 2 ③>①, ⑤)。再就職コース群も専業主婦コース群よりも資格や技能の習得に熱心である (表 2 ④>⑤)。

(家族内資源)

1) 経済的資源—家計状況—

専業主婦コース群は、DINKs コース群や両立コース群、再就職コース群よりも現在の家計の状況にゆとりがある (表 2 ⑤>②, ③, ④)。

2) 社会関係資源—結婚への圧力、出産への圧力、女性の就職規範、家事・育児規範、家族が気持ちを理解—

両立コース群は、非婚就業コース群や DINKs コース群よりも結婚や出産への家族の圧力が強い (表 2 ③>①, ②)。同様に再就職コース群や専業主婦コース群も、それぞれ結婚や出産への家族の圧力が強い (表 2 ④>①, ②, ⑤>①, ②)。

女性の就職に対する家族規範については、非婚就業コース群は、再就職コース群や専業主婦コース群よりも家族から女性が外で働くことを要請されている (表 2 ①>④, ⑤)。同様に DINKs コース群や両立コース群も再就職コース群や専業主婦コース群よりも家族から女性が外で働くことを要請されている (表 2 ②>④, ⑤, ③>④, ⑤)。再就職コース群は、専業主婦コース群よりも家族から女性が外に出て働くことを要請されている (表 2 ④>⑤)。

家事・育児に関する家族規範については、再就職コース群は非婚就業コース群よりも、女

性が家事・育児をするべきだと考えている(表2 ④>①)。専業主婦コース群は、非婚就業コース群や両立コース群よりも、女性が家事・育児をするべきだと考えている(表2 ⑤>①, ③)

両立コース群や再就職コース群、専業主婦コース群は、非婚就業コース群よりも家族が自分の気持ちを理解してくれると考えている(表2 ③, ④, ⑤>①)。両立コース群や再就職コース群は、DINKs コース群よりも、家族が自分の気持ちを理解してくれると考えている(表2 ③, ④>②)。

(家族外資源)

1) 人的資源—就職能力発揮重視—

両立コース群は、専業主婦コース群よりも就職先を選択する時は、自分の能力や個性が生かせる職場を重視する傾向がある(表2 ③>⑤)

2) 社会関係資源—同性との交友関係、先生との関係満足度、就職支援満足度、就職福利厚生重視—

両立コース群と再就職コース群は、非婚就職継続コース群より同性の交友関係に満足している(表2 ③>①, ④>①)。

非婚就職継続コース群は、専業主婦コースよりも現在の先生との関係に満足している(表2 ①>⑤)。両立コース群は、専業主婦コース群よりも現在の就職支援に満足している(表2 ③>⑤)。

また両立コース群は、専業主婦コース群よりも就職先を選択する時は、福利厚生が整っていることを重視する傾向がある(表2 ③>⑤)。

6. 考察

専業主婦コースを選択した群は、他の群より将来の見通しが明るいが、親から離れて住むことには否定的である。家族内資源のうち、他の群より経済資源に依存しており豊かな家計を営んでいる。しかし家族内社会関係資源では、非婚就業コース群や DINKs コース群より結婚や子どもを持つことに対する家族からの圧力は強く、家事・育児に関する家族規範(家事・育児は女性がするものだという規範)が強固である。

両立コース群は専業主婦コース群より資格・技能といった個人資源を持つことを優先している。再就職コース選択群や専業主婦コース群より親から離れたいという離家の傾向がある。家族内経済資源は専業主婦コース群よりも乏しい。家族内社会関係資源については、結婚や子どもを持つことに関しての家族からの圧力は専業主婦コース群と同様に強いが、しかし女性が働くことに関して専業主婦コース群や再就職コース群より家族は支持しており、理解がある。また家事・育児を女性がするべきという家族規範は専業主婦コース群より弱い。「家族が気持ちをわかってくれる」という社会関係資源については非婚就業コース群や DINKs コース群より高い評価をしている。両立コース群の特徴は、家族外の社会関係資源を専業主婦コース群より持っていることである。友人関係では同性の交友関係の絆は非婚就職コース

群より強い。就職支援の満足度は専業主婦コース群より大きく、また就職先の選択においても専業主婦コース群よりも能力発揮や福利厚生を重視している。

非婚就職コース群の特徴は、将来の暮らし向きに悲観的である、また結婚や出産などに対する家族の圧力は弱い。家族を将来持つことを希望している両立コース群や再就職群、専業主婦群より「家族が気持ちをわかってくれる」という情緒的な家族内社会関係資源を持っていない。むしろ先生との関係の絆が強く家族外社会関係資源に重きを置いている。

DINKs コース群は、専業主婦コース群より親からの離家に対して積極的である。両立コース群や再就職コース群、専業主婦コース群より、結婚や子どもを持つことに対する家族からの圧力は弱い。女性が働くことに関しては家族の理解があるが、再就職コース群よりは「家族が気持ちをわかってくれる」という点では値が低い。

再就職コース群と専業主婦コース群を比較すると、再就職群のほうが資格や技能のような個人の人的資源を持つことを希望し、家族も女性が働くことに理解がある。

以上から専業主婦コース群は、学生時代から家族の経済資源に依存し、また将来の経済的見通しに対しても楽観的である。それは家族からの結婚や子どもを持つことに対する圧力を背景にして性別役割分業規範を内面化しているからである。親から離れて住むことにも消極的である。しかし両立コースは、結婚や子どもを持つことに対して家族から圧力はあるが、女性の就職に対しては現在の家族は理解があり、現在の家族に対しても「家族も気持ちがわかってくれる」という情緒的資源を持っている。それゆえ専業主婦コース群よりも就職支援に力を入れており、満足度も高い。就職先も能力の発揮ができることを第一に考え、両立のために福利厚生が優れているところを就職先に求めている。

7. 結論と今後の課題

大学生のライフコース選択には、大学生の定位家族がモデルとなっている。現在の両親の役割分担の現状が女子大生のライフコースに大きく影響をおよぼし、さらに「性別役割分業」に対する意識が将来のライフコースを規定していることが明らかになった。

資源論モデルは大学生のライフコース選択に有効なモデルであった。

仮説1 個人の資本（経済資源もしくは人的資源など）の種類、程度はライフコースの選択に影響する。

仮説2 家族内社会資本（女子大生と家族との関係資源など）の種類、程度はライフコースの選択に影響する。

仮説3 家族外社会資本（女子大生と大学との関係資源、友達との関係資源、女子大生の就職先との関係資源など）の種類、程度はライフコースの選択に影響する。

生田ら（2014）は、2006年に内閣府男女共同参画局（2006）によって2006年に実施されたアンケート「女性のライフプランニング支援に関する調査」のデータを分析した結果、今回の分析に係る下記のような結果を導き出している。

1. 現在の正社員の選択には、自分自身の能力やキャリアなど自己に依拠する要因が重要である。

2. 家族の支援が受けられるということや自分自身の性別役割分業意識はもちろん周囲からの性別役割分業に関するプレッシャーがないことも重要な要因である。

この調査は 30 代から 40 代の女性が対象となった調査である。ライフコースの選択については継続フルタイム 23.4%、継続パートタイム 12.5%、再就職フルタイム 9.4%、再就職パートタイム 21.6%、専業主婦 27.6%であった。今回の大学生が選択したライフコースと比較してみよう。30 代から 40 代の継続フルタイムと継続パートタイムを併せたライフコース 35.9%が大学生の場合両立ライフコース群にあたり、31.6%であった。

再就職フルタイムと再就職パートタイムを併せて 32.0%であり、大学生の 48.1%より少ない。また専業主婦コースも 30 代 40 代が 27.6%であるのに対して、大学生は 12.2%であった。このような 30 代、40 代の現実に経験しているライフコースと大学生の希望するライフコースは選択が異なるが、ライフコースの選択に対して仮説 1 と仮説 2 は同様の結果となった。

女子大学生がその後年齢を重ねて就職し結婚した時、現在選択した大学生時代の理想のライフコースの選択は、実際のライフコースにどのように投影されるのであろうか？

理想のライフコースは、そのまま現実のライフコースに具現化されるわけではない。実際に働いた職場の社会関係資源や結婚相手として出会った配偶者との社会関係資源、配偶者の家族との社会関係資源などが大きな影響を及ぼすことが考えられる。今後の課題として理想のライフコースがどのような資源の影響をうけて現実のライフコースとなるのか、その影響要因を検証したい。

* 本調査は、平成 24 年度科学研究費補助金【基盤研究】課題番号 23500898 の助成を受け実施した。

* また本調査は、2012 年度神戸松蔭女子学院大学研究倫理委員会の承認を受けて実施した。

参考文献

1. ジェームス・S・コールマン、1988、[金光 淳訳]「人的資本形成における社会関係資本」リーディングス ネットワーク論、2007、勁草書房、p.205-234
2. 京都産業大学 藤野敦子研究会 社会保障分科会、生田大船、落合総太郎、庄瀬仁美田矢麻乃、徳井翔子、徳久徹真、藤村宗範、宮原美樹、2011、「既婚女性のための労働力活用のための政策提言 - 日本潜在成長力のカギ」、[http://www.isfj.net/ronbun_backup/2012/h06.pdf#search='%E6%97%A2%E5%A9%9A%E5%A5%B3%E6%80%A7%E3%81%AE%E5%8A%B4%E5%83%8D%E5%8A%9B%E6%B4%BB%E7%94%A8%E3%81%AE%E3%81%9F%E3%82%81%E3%81%AE%E6%94%BF%E7%AD%96%E6%8F%90%E8%A8%80'](http://www.isfj.net/ronbun_backup/2012/h06.pdf#search='%E6%97%A2%E5%A9%9A%E5%A5%B3%E6%80%A7%E3%81%AE%E5%8A%B4%E5%83%8D%E5%8A%9B%E6%B4%BB%E7%94%A8%E3%81%AE%E3%81%9F%E3%82%81%E3%81%AE%E6%94%BF%E7%AD%96%E6%8F%90%E8%A8%80'2014年11月24日引用、)2014 年 11 月 24 日引用、
3. 国立社会保障・人口問題研究所の「第 14 回出生動向調査・独身者調査」http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou14_s/doukou14_s.asp
4. 菰淵緑、1992、「社会問題研究」42 (1) p.19-36

5. 宮本美智子、2004、『ポスト青年期と親子戦略—大人になる意味と価値の変容—』勁草書房
6. 松岡英子、1993、「在宅介護老人の介護者ストレス」、家族社会学研究、No. 5、1993、p.101-112
7. 松岡英子、1994、「在宅老人介護者のストレスに対する資源の緩衝効果」、家族社会学研究、No.6、1994、p.81 -95
8. 内閣府 男女共同参画室、2006「女性のライフプランニング支援に関するデータ」<http://www.gender.go.jp/kaigi/senmon/wlb/siryo/pdf/wlb02-4-2.pdf#search=%E5%A5%B3%E6%80%A7%E3%81%AE%E3%83%A9%E3%82%A4%E3%83%95%E3%83%97%E3%83%A9%E3%83%B3%E3%83%8B%E3%83%B3%E3%82%B0%E6%94%AF%E6%8F%B4%E3%81%AB%E9%96%A2%E3%81%99%E3%82%8B%E8%AA%BF%E6%9F%BB>
9. 内閣府、2012、「男女共同参画社会に関する世論調査(平成24年度10月調査、内閣府 2013)¹⁾
10. 内閣府 男女共同参画局推進課、2013、「共同参画」平成 25 年 3 月号
11. 上野淳子、2012、「ジェンダーおよび学歴による将来像の違い」四天王寺大学紀要 第 54 号
12. 山田正弘 2013『パラサイト・シングルの時代』筑摩書房
13. 山田昌弘 2013「[「女性労働の家族依存モデルの限界」、労働政策フォーラム 2013 年 7 月 13 日、http://www.jil.go.jp/event/ro_forum/20130713/resume/02_yamada.pdf#search=%E3%80%8C%E5%A5%B3%E6%80%A7%E5%8A%B4%E5%83%8D%E3%81%AE%E5%AE%B6%E6%97%8F%E4%BE%9D%E5%AD%98%E3%83%A2%E3%83%87%E3%83%AB%E3%81%AE%E9%99%90%E7%95%8C%E3%80%8D%E5%BC%88%E5%B1%B1%E7%94%B0%E3%80%812013%E5%BC%89
14. 渡部美知、1977、「家族勢力研究の意義と限界」、家政学研究 Vol24. No. 1

(受付日 : 2014. 12. 10)